

〔報 告〕

FDM II を用いた 1 歳 6 か月までの乳幼児をもつ家族の家族機能の検討

中 村 由美子¹⁾²⁾

要 旨

家族のライフサイクルの中で、子どもが誕生して新しいメンバーとして加わる時期は、家族が発達課題と取り組みながら絆を深めていく時期であると同時に、危機的な状況も起こりやすい。本研究は、Family Dynamics Measure II (FDM II) 日本語版を用いて、母親を対象に 1 歳 6 か月までの子どものいる家族の家族機能の実態を知ることが目的とした。有効回答を得られたものは 233 名であった。本調査の結果を FDM II を構成する 6 つの下位尺度で検討すると、1 歳 6 か月までの子どもをもつ家族の家族機能は、明瞭なコミュニケーションをとり役割相互依存も高いが、柔軟性や個別性が低めであるという特徴がみられた。そのことから、子どもが誕生し、育てていくこの時期には、母親が新しく加わった母親役割に対して意識的に家族内でコミュニケーションを図ろうとしていることや、柔軟性が低いことより家族として変化を生み出す機能が低いことが考えられた。今後は、我が国の文化背景も踏まえ、FDM II 日本語版の内的一貫性を高めるためにも、質問項目を精選していくことなどが示唆された。

キーワード：ライフサイクル、家族機能、子どもの誕生、母親、FDM II

I. はじめに

家族のライフサイクルの中で、子どもが誕生して新しい家族メンバーとして加わる時期は、家族が発達課題を乗り越えて絆を強めていく時期である¹⁾が、家族にとっての危機的な状況としても重要視されている²⁾³⁾。最近の少子化や核家族化に伴い、家族の養育機能が低下し、育児不安や児童虐待などが社会問題となつてきているという報告²⁾⁴⁾もあり、子どもが誕生する時期の家族には援助が必要であるといわれている⁵⁾。

北米では 1970 年頃より家族看護学において家族を 1 つのユニットとしてとらえる家族システム概念が提唱され、Family APGAR (Smilkstein, 1978)⁶⁾や FACES (Olson, Bell & Portner, 1978)⁷⁾などの尺度が

開発されている。日本においても、本誌(2000年)に FFFS (Feetham 家族機能調査) 日本語版⁸⁾が発表されている。著者は、健康な家族の機能を測定するためにアメリカで開発された Family Dynamics Measure II (FDM II) 日本語版を用いて、1 歳 6 か月までの乳幼児のいる母親を対象に調査を行い、小さな子どもを育てている家族の特徴について結果を得たので、ここに報告する。

II. 方 法

1. 家族力学尺度 FDM II

FDM II は、Barnhill (1979) の healthy family system の概念枠組み⁹⁾を基礎にし、アメリカの White らのグループによって開発されたものである¹⁰⁾。家族の健康や機能(家族力動)を測定する尺度であり、66 項目 6 段階のリカート尺度である。Barnhill が健康な家族の機能として述べている 8 側面のうち、「個別性

¹⁾北里大学大学院看護学研究科博士後期課程

²⁾青森県立保健大学

「一捲き込む」,「相互依存—孤立」,「柔軟性—硬直性」,「安定性—無秩序」,「明瞭なコミュニケーション—ゆがめられたコミュニケーション」,「役割相互依存—役割葛藤」の6側面で家族機能を測定している。この6側面の下位尺度(各尺度は9~13項目で構成)それぞれのスコアの平均を測定し,高い方が家族機能が高いと判定され,一般の家族との比較などから特定のグループの家族の特徴を明らかにすることに用いられている。FDM II 日本語版は,1997年にアメリカに住む日本人家族を対象にその妥当性と信頼性が検証されている¹¹⁾。そのアメリカに住む日本人家族は,70%が子どもをもっている家族であった。

2. 調査方法

1) 調査の目的

FDM II 日本語版を用いて,1歳6か月までの子どもがいる母親の家族機能を知ることを目的とした。

2) 調査対象

首都圏に位置し人口約60万人のA市に在住する4か月および1歳6か月の健康な子どもをもつ母親と,同じくA市のB大学病院で出生した生後1か月の健康な子どもをもつ母親を対象とした。

なお,健康な子どもとは,正期産で出生し,発達プレスクリーニング用質問紙(JPDQ)により発達項目をチェックし,年齢相応の発達をしていると考えられる乳幼児とした。また,母親が父親と一緒に住んでおり,文化背景も考慮するため,両親とも日本人であることとした。

3) データの収集方法と分析

A市で行う4か月健診,1歳6か月健診,およびA市のB大学病院の1か月健診に来所する母親に調査者が調査を依頼し,質問紙に回答して郵送してもらう方法をとった。質問紙には,参加は自由で無記名であり,データは統計的に処理されることなどを明記してプライバシーの保護について配慮した。

データの分析は,統計解析ソフトウェアSPSSバージョン9を使用して単純集計を行い,尺度の内的一貫性をCronbachの α 係数により分析した。

表1. 回答者の属性

(n=233)		
項目	人数(名)(%)	平均(標準偏差)
母親の年齢		32.3(±3.5)歳
父親の年齢		33.8(±4.2)歳
家族形態	核家族 拡大家族	210(90.1%) 23(9.9%)
子どもの数		1.48(±0.62)名
母親の職業	専業主婦 会社員 専門職(看護師等) パート	196(84.1%) 24(10.3%) 12(5.2%) 1(0.4%)
父親の職業	会社員 専門職(教員等) 自営業 その他	164(70.4%) 31(13.2%) 19(8.2%) 19(8.2%)

III. 結果

平成12年6月~8月に調査を実施し,有効回答を得られたものは233名であった。その内訳は,1か月健診95名から回収できた34名(回収率35.7%)のうち有効回答数30,4か月健診599名から回収できた127名(回収率21.2%)のうち有効回答数106,1歳6か月健診520名から回収できた99名(回収率19.0%)のうち有効回答数97であった。1つ以上の項目に記載がなかったものを無効回答として除外した。

1. 回答者の属性について

有効回答を得られた233名の分析を行った。回答者の属性は表1に示した。母親の年齢の平均は32.3(±3.5)歳で,23~41歳の範囲であった。父親の年齢の平均は33.8(±4.2)歳で,24~53歳の範囲であった。家族形態は,核家族世帯が210世帯(90.1%),三世帯世帯が23世帯(9.9%)であった。子どもの数は平均1.48(±0.62)名で,1~4名の範囲であり,1人つ子が約半数の129家族(55.3%)であった。母親の職業は,専業主婦が196名(84.1%)で,その他は会社員と看護師などの専門職であった。父親の職業は,会社員が164名(70.4%)と最も多く,その他は教員などの専門職と自営業などであった。

2. FDM II の内的一貫性

Cronbach α は,全項目で0.79~0.85であり,6つの

表2. FDM II 日本語版の各グループの Cronbach の α 係数 (n=233)

FDM II のグループ	1 か月健診 児家族 (n=30)	4 か月健診 児家族 (n=106)	1 歳 6 か月健診 児家族 (n=97)	全 体 (n=233)
1. 「個別性—捲き込む」 (13 項目)	0.51	0.49	0.42	0.46
2. 「相互依存—孤立」 (11 項目)	0.76	0.80	0.82	0.81
3. 「柔軟性—硬直性」 (10 項目)	0.51	0.71	0.70	0.68
4. 「安定性—無秩序」 (9 項目)	0.64	0.69	0.67	0.68
1. 「明瞭なコミュニケーション— ゆがめられたコミュニケーション」 (11 項目)	0.86	0.85	0.87	0.86
6. 「役割相互関係—役割葛藤」 (12 項目)	0.73	0.83	0.85	0.83
全 項 目	0.79	0.85	0.85	0.84

表3. A 市の子どもをもつ家族の FDM II スコア

(n=233)

FDM II のグループ	1 か月健診 児家族 (n=30)	4 か月健診 児家族 (n=106)	1 歳 6 か月健診 児家族 (n=97)	全 体 (n=233)
1. 「個別性—捲き込む」 (13 項目)				
グループの平均値 (標準偏差)	55.0(±5.8)	54.7(±5.7)	53.7(±5.4)	54.2(±5.5)
1 項目の平均値 (標準偏差)	4.23(±0.4)	4.20(±0.4)	4.13(±0.3)	4.16(±0.4)
2. 「相互依存—孤立」 (11 項目)				
グループの平均値 (標準偏差)	52.6(±5.1)	51.5(±6.0)	49.8(±6.7)	50.9(±6.2)
1 項目の平均値 (標準偏差)	4.78(±0.4)	4.68(±0.5)	4.52(±0.6)	4.62(±0.5)
3. 「柔軟性—硬直性」 (10 項目)				
グループの平均値 (標準偏差)	40.1(±4.4)	39.9(±5.8)	39.3(±5.6)	39.6(±5.5)
1 項目の平均値 (標準偏差)	4.01(±0.4)	3.99(±0.5)	3.93(±0.5)	3.96(±0.5)
4. 「安定性—無秩序」 (9 項目)				
グループの平均値 (標準偏差)	42.8(±4.6)	42.8(±5.0)	41.2(±5.4)	42.1(±5.1)
1 項目の平均値 (標準偏差)	4.75(±0.5)	4.75(±0.5)	4.57(±0.6)	4.67(±0.5)
5. 「明瞭なコミュニケーション— ゆがめられたコミュニケーション」 (11 項目)				
グループの平均値 (標準偏差)	52.6(±7.6)	53.1(±7.3)	51.2(±8.5)	52.2(±7.8)
1 項目の平均値 (標準偏差)	4.78(±0.7)	4.82(±0.6)	4.65(±0.8)	4.74(±0.7)
6. 「役割相互関係—役割葛藤」(12 項目)				
グループの平均値 (標準偏差)	51.3(±6.8)	52.0(±8.3)	49.4(±9.4)	50.8(±8.6)
1 項目の平均値 (標準偏差)	4.27(±0.5)	4.33(±0.7)	4.11(±0.8)	4.23(±0.7)

下位尺度では「個別性—捲き込む」が 0.42~0.51 と最低値を示し、「安定性—無秩序」が 0.64~0.69 でその次に低かった。他の 4 つの下位尺度は、1 か月の乳児をもつ家族の「柔軟性—硬直性」が 0.51 と低かったが、他は 0.70~0.87 の範囲内であった (表 2)。

3. FDM II による 1 歳 6 か月までの子どもをもつ母親の家族機能

FDM II を用いて測定した 1 か月、4 か月および 1 歳 6 か月の乳幼児をもつ母親の家族機能について表 3 に示した。下位尺度の平均値は、高い順に「明瞭なコミュニケーション—ゆがめられたコミュニケーション」

が 4.65~4.82, 「相互依存—孤立」が 4.52~4.78, 「安定性—無秩序」が 4.57~4.75, 「役割相互関係—役割葛藤」が 4.11~4.33, 「個別性—捲き込む」が 4.13~4.23, 「柔軟性—硬直性」が 3.93~4.01 であった。6 つの下位尺度でみると「柔軟性—硬直性」が最も低く、「明瞭なコミュニケーション—ゆがめられたコミュニケーション」が最も高く、1 歳 6 か月の子どもがいる家族は、6 つの下位尺度とも一番低い値であった。子どもの年齢による違いについては、一元配置分散分析で有意確率 0.057 で有意差が認められなかった。

表4. 項目別にみた FDM II の平均スコア

(n=233)					
項目	平均(±標準偏差)	項目	平均(±標準偏差)	項目	平均(±標準偏差)
no. 1	4.78(±0.88)	no. 23	5.25(±0.83)	no. 45	3.78(±1.30)
2	5.20(±0.84)	24	4.13(±1.36)	46	5.20(±0.74)
3	1.88(±0.74)	25	4.31(±1.29)	47	4.63(±1.10)
4	4.60(±1.17)	26	4.69(±1.16)	48	4.42(±1.11)
5	4.72(±1.05)	27	5.02(±1.15)	49	4.52(±1.20)
6	5.00(±1.17)	28	3.89(±1.32)	50	3.39(±1.62)
7	4.34(±1.36)	29	3.25(±1.11)	51	4.28(±1.23)
8	3.64(±1.22)	30	5.22(±0.76)	52	4.87(±0.92)
9	3.69(±1.06)	31	5.32(±0.75)	53	4.50(±1.11)
10	4.36(±1.00)	32	5.28(±0.91)	54	3.98(±1.47)
11	2.46(±0.77)	33	5.13(±0.89)	55	5.09(±0.99)
12	4.06(±1.20)	34	4.70(±0.94)	56	5.32(±0.86)
13	3.93(±1.05)	35	4.33(±0.95)	57	4.65(±1.43)
14	5.34(±0.77)	36	4.72(±0.89)	58	5.47(±0.62)
15	3.72(±1.20)	37	3.87(±1.30)	59	4.33(±1.13)
16	4.59(±1.09)	38	4.51(±1.11)	60	3.47(±1.23)
17	4.95(±0.96)	39	2.92(±1.11)	61	4.83(±0.98)
18	5.35(±8.63)	40	3.65(±1.19)	62	4.91(±1.02)
19	4.48(±1.02)	41	3.87(±1.00)	63	3.97(±1.40)
20	5.04(±0.97)	42	3.73(±1.12)	64	5.24(±0.88)
21	4.72(±1.25)	43	4.82(±0.97)	65	3.00(±1.12)
22	4.27(±1.33)	44	4.51(±0.97)	66	4.06(±1.25)

表5. 子どもの数別にみた FDM II の平均スコア

(n=233)		
FDM II のグループ	1人 (n=131)	2人~4人 (n=102)
1. 「個別性—巻き込む」 (13項目)		
グループの平均値 (標準偏差)	55.1(±5.0)	53.1(±6.0)
1項目の平均値 (標準偏差)	4.23(±0.3)	4.08(±0.4)
2. 「相互依存—孤立」 (11項目)		
グループの平均値 (標準偏差)	51.7(±6.1)	49.8(±6.2)
1項目の平均値 (標準偏差)	4.70(±0.5)	4.52(±0.5)
3. 「柔軟性—硬直性」 (10項目)		
グループの平均値 (標準偏差)	40.4(±5.4)	38.6(±5.4)
1項目の平均値 (標準偏差)	4.04(±0.5)	3.86(±0.5)
4. 「安定性—無秩序」 (9項目)		
グループの平均値 (標準偏差)	42.5(±5.1)	41.5(±5.1)
1項目の平均値 (標準偏差)	4.72(±0.5)	4.61(±0.5)
5. 「明瞭なコミュニケーション— ゆがめられたコミュニケーション」 (11項目)		
グループの平均値 (標準偏差)	52.9(±7.3)	51.3(±8.5)
1項目の平均値 (標準偏差)	4.80(±0.6)	4.66(±0.7)
6. 「役割相互関係—役割葛藤」 (12項目)		
グループの平均値 (標準偏差)	52.1(±8.1)	49.2(±9.0)
1項目の平均値 (標準偏差)	4.34(±0.6)	4.10(±0.7)

66の項目別では、1項目あたりの平均値の上位3項目は、no. 58「必要なとき、家族の者と連絡をつける方法がある」、no. 18「私は家族から取り残された気がする」とno. 31「自分の意見をもつことを許されている」で、1項目あたりの平均値が5.3以上であった。

1項目あたりの平均値の下位3項目は、no. 3「私は家族の人たちに注意を払っている」やno. 11「物事をするとき、正しいやり方であることが大事だ」、no. 39「同じ信念をもつことが大事だ」で、1項目あたりの平均値が3.0未満であった。

表6. FDM IIを用いた他の調査結果

FDM IIのグループ	アメリカ在住の 日本人家族 (n=161)	アメリカの一般家族 (n=121)	フィンランドの 子どものいる家族 (n=74)
1. 「個別性—巻き込む」			
グループの平均値 (標準偏差)	56.3(±5.6)	60.5(±7.1)	60.1(±5.7)
1項目の平均値 (標準偏差)	4.33(±0.4)	4.65(±0.5)	4.63(±0.4)
2. 「相互依存—孤立」			
グループの平均値 (標準偏差)	55.2(±6.7)	51.9(±8.2)	56.8(±6.0)
1項目の平均値 (標準偏差)	5.02(±0.6)	4.72(±0.7)	5.17(±0.8)
3. 「柔軟性—硬直性」			
グループの平均値 (標準偏差)	41.0(±5.7)	37.9(±5.7)	41.7(±4.8)
1項目の平均値 (標準偏差)	4.10(±0.6)	3.79(±0.6)	4.17(±0.4)
4. 「安定性—無秩序」			
グループの平均値 (標準偏差)	43.7(±5.4)	39.8(±6.4)	42.4(±4.8)
1項目の平均値 (標準偏差)	4.86(±0.6)	4.43(±0.7)	4.72(±0.5)
5. 「明瞭なコミュニケーション— ゆがめられたコミュニケーション」			
グループの平均値 (標準偏差)	53.6(±7.5)	47.2(±8.6)	54.1(±6.9)
1項目の平均値 (標準偏差)	4.88(±0.7)	4.30(±0.8)	4.92(±0.6)
6. 「役割相互関係—役割葛藤」			
グループの平均値 (標準偏差)	50.9(±9.2)	48.9(±7.8)	50.6(±8.8)
1項目の平均値 (標準偏差)	4.24(±0.8)	4.08(±0.6)	4.22(±0.7)

子どもの数による平均値を比較すると、子どもが1人の母親の方が2人以上の子どもをもつ母親よりも6つの下位尺度すべてが高かったが、有意差はみられなかった(表5)。

IV. 考 察

厚生省統計情報部の平成11年国民生活基礎調査によると、児童(18歳未満の未婚の者)のいる世帯の平均児童数は、1.75人となっている¹²⁾。本調査の世帯の平均児童数は1.48人であったが、対象となった家族の子どもの年齢が1歳6か月までであり、一人っ子が半数をしめていたことから、年齢的に両親が若い集団であるといえる。A市は首都圏のベッドタウンで、若い世代で核家族が多いのが特徴であり、本調査の家族機能に影響を与えていたことが考えられた。

本調査の結果をFDM IIの6つの下位尺度で検討すると、1歳6か月までの子どもをもつ母親は、明瞭なコミュニケーションをとり役割相互依存も高めで、柔軟性や個別性が低めであるという特徴がみられた。現在の家族の特徴として、経済や教育、娯楽な

どの家族機能は弱まり、愛情という機能が卓越してきている中¹³⁾で、情緒的な結びつきを強めるコミュニケーション機能が高めであることは当然ともいえる。その反面、柔軟性が低いことは、家族の順応性、適応性が低いことを示し、オープンシステムである家族が、社会という外からの影響を受けにくくなっていることも考えられ、現代家族の問題を考えていく上で大切な示唆と考える。乳幼児をもつ母親の柔軟性が低いことは、家族として変化を生み出す機能が低いことが考えられる。Maturana(1978)は変化について「家族が(ストレスなどによって)受けている動揺を補い、家族構造の安定を維持するために、家族構造の中で起こる変化である。その変化は、システムにとっては動揺として知覚されるので、変化は次の変化を、次いで安定を生み出す。」¹⁴⁾と記述している。小さな子どものいる家族にとっては、新しい家族メンバーである子どもを受け入れて安定するためには柔軟性が高めであることが望ましい。社会の変化が家族機能を弱め、危機対処能力を弱めているという指摘¹⁵⁾にもあるように、家族がシステムとしてどのように対処していくのかということも視野にいれ、新しい家族メンバーをうけいれて発達課題をク

リアしていくという家族援助の方法を考えることも必要になってきている。

また、「個別性—巻き込む」の下位尺度の値が低かった。森岡は、「家族という集団において個人的価値や目標の追求を優先させようとする傾向が個人化であり、個人の生活領域が確立されることとあってよい」¹⁶⁾と述べており、この項目は社会的な影響を強く受けやすいことが考えられる。アメリカやフィンランドでの同様の調査と比べても今回の調査結果は低く、我が国が個人主義を強く主張しないという文化背景も考慮すると、この側面については、今後さらに検討することが必要と考える。さらに、66の項目別では、「私は家族の人たちに注意を払っている」の得点が低く、このことは、養育している母親の余裕のなさをあらわしていることも考えられる。この結果だけで断定することはできないが、さらに検討していくことが重要と考えられる。

McGoldrickが家族のライフサイクルについて述べているように、子どもが誕生することは家族に新しい家族メンバーが加わることであり、両親にとっては父親と母親という新しく親役割が増えることである¹⁷⁾。家族システムにとっては、夫婦関係とともに親子関係という新しいシステムが加わることは、より複雑な家族関係を生じることになる。今回の調査結果では、1か月あるいは4か月の乳児をもつ母親と一人っ子である母親の家族機能が有意差はなかったが全体として高めであったことから、子どもが誕生し、育てていくこの時期には、母親が新しく加わった母親役割に対して意識的に家族内でコミュニケーションを図ろうとしていることや、新しく赤ちゃんという家族メンバーが加わったことにより、コミュニケーションをとる機会が増えたことなどが影響していることも考えられた。乳幼児のいる家族の家族機能としては、養育機能が重要であり、その役割行動は父親や母親に集中する。そのため、父母が各々の役割行動をとることが、家庭生活において大きな意味をもつことが知られている¹⁷⁾。今回の調査では、核家族つまり夫婦家族制の家族が多く、首都圏という

地域性をももちろん考慮しなければならないが、小家族化していくことで、よりコミュニケーションが図られていることが示唆された。

フィンランドの子どものいる家族と比較すると、我が国の調査では6つの下位尺度すべてが低かったが、母親のみを対象とした調査であり、我が国の特徴については、ジェンダーや社会的な影響も含め今後さらに分析していくことが課題と考えられる。

さらに、乳幼児のいる家族の家族機能を測定するために、以下のような課題も示唆された。家族規模が小家族化していることにより、家族内でのコミュニケーションがとりやすいことはあるが、牧野の調査¹⁸⁾によると、1人目の子どもの場合に母親の育児不安が高いこと、また、川崎市¹⁹⁾の調査では0歳児をもつ母親の場合に育児不安が高いという報告もあり、今回調査で用いたFDM IIの6側面だけでは、特に心理面に影響している家族機能の測定が難しい面があることが示唆された。今回は1か月、4か月、1歳6か月の乳幼児をもつ母親を対象にデータを収集しているが、今後は家族のライフサイクルを考えて子どもの年齢を拡大していくことや、高齢者家族を対象にした調査も必要と考える。

今回我が国では初めて乳幼児のいる家族にFDM IIを用いたが、回収率は19.0%~35.7%と低めであり、これは文化背景が異なることで解答しにくい質問内容があったことや、66項目という項目数は育児に忙しい母親にとっては負担の大きいものであること、インフォームドコンセントで自由参加を強調したことなどが影響していたと考えられる。そのため、今後はFDM IIを簡便に用いることができるように尺度を開発することなども必要になってくると思われる。結果に示したように、6つの下位尺度では「個別性—巻き込む」と「安定性—無秩序」の2側面のCronbachの α 係数が低かった。Cronbachの α 係数の値はアメリカやフィンランドの調査とも同様な結果であり我が国だけが低いわけではないが、今後は内的一貫性を高めるためにも質問を精選して我が国の文化背景にあった項目にするなど、さらに検討し

ていく必要性が示唆された。

FDM II は健康な家族の家族機能を6つの下位尺度で測定することにより、家族内の機能を評価するのに有用であることがわかった。しかし、信頼性、妥当性などについては十分支持されているとはいえ、さらに検討が必要であることが明らかになった。今回の調査を通して子どものいる家族を援助していく看護者として、家族機能に目をむけて援助していくことの重要性を確かめ、今後の課題について示唆を得ることができた。

V. おわりに

本調査は、首都圏という限られた地域での調査であり、さらに他の地域についても検討が必要と思われる。少子化がすすみ、家族形態も多様化している中で、家族機能から看護者としての援助を考えていくことは、益々重要になってくるものと思われる。

謝 辞

本調査にあたり、ご協力くださいましたご家族の皆様、関係者の皆様方に心より感謝致します。

{ 受付 '01.7.14 }
{ 採用 '02.6.1 }

文 献

- 1) 森山美知子：ファミリーナーシングプラクティス。91—92, 医学書院, 東京都, 2001
- 2) 池田由子：親子関係のゆがみ—児童虐待を中心として—。小児看護, 18(11), 1519—1526, 1995
- 3) 白畑範子, 中村美保, 兼松百合子：健康な乳幼児の母親の育児ストレスの特徴と家族特性との関連, 日本看護科学

- 会誌。16(2), 246—247, 1996
- 4) 杉下知子：家族看護学からみた育児, 介護支援。母子保健情報, 30, 30—36, 1994
- 5) 森岡清美, 望月 嵩：新しい家族社会学 四訂版。66—70, 培風館, 東京都, 2000
- 6) Smilkstein, G.: The family apgar. Journal of Family Practice, 6, 1231—1239, 1978
- 7) Olson, D., Bell, R. & Portner, J.: FACES: Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales. Unpublished Technical Report Family Social Science, University of Minnesota, 1978
- 8) 法橋尚宏, 前田美穂, 杉下知子：FFFS (Feetham 家族機能調査)日本語版 I の開発とその有効性の検討。家族看護学研究, 6(1), 2—10, 2000
- 9) Barnhill, L.: Health family systems. Family Coordinator, 28, 94—100, 1979
- 10) Lasky, P., Buckwalter, K.C. & White, M.A.: Developing an Instrument for the Assesment of Family Dynamics. Western Journal of Nursing Research, 7(1), 40—57, 1985
- 11) Sekito, Y.: Family Dynamics among Japanese in the United States. 3 d International Nursing Research Conference, 200, 1998
- 12) 厚生省の指標：国民の福祉の動向。47(12), 28, 2000
- 13) 森岡清美, 石原邦雄, 佐竹洋人, 他：家族社会学の展開。170, 培風館, 東京都, 1997
- 14) Wright, L.M., Leahey, M.: Nurses and Families (3 d-ed). 103—104, F.A. Davis, Philadelphia, 2000
- 15) 前掲 13), 72.
- 16) 前掲 13), 28.
- 17) 前掲 13), 172.
- 18) 牧野カツコ：乳幼児をもつ母親の生活と育児不安。家庭教育研究所紀要, 3, 43—56, 1982
- 19) 山根常男, 玉井美知子, 石川雅信編：わかりやすい家族関係学。109, ミネルヴァ書房, 東京, 1997
- 20) Hakulinen, T. & Paunonen, M.: Family Dynamics of child-bearing and childrearing families in Finland. Journal of Advanced Nursing, 22, 830—834. 1997
- 21) Wright, L.M. & Leahey, M.: Nurses and families (2 nd ed). F. A. Davis, Philadelphia, 1994
- 22) McCubbin, H.I.: CHIP Coping Health Inventory foe Parents. Family Assessment for Research and Practice, Madison University of Wisconsin, 1987
- 23) Ackerman, N.: The psychodynamics of family life. New York Basic, 1958

The functions of families with infants under 18 months old using the Japanese version of FDM II

Yumiko Nakamura

¹⁾Doctoral candidate, School of Nursing, Kitasato University

²⁾Aomori University of Health and Welfare

Key words : life cycle, family functions, birth, mothers, FDM II

The birth of a child plays a big role in the life cycle of a family. As the family adds a new member, it deepens its ties through the developmental tasks facing the family and also faces critical situations.

This research aimed at learning about actual family functioning from the mothers of infants under 18 months years old using the Japanese version of Family Dynamics Measure II (FDM II). I obtained valid responses from 233 subjects. My results on the 6 dimensions making up the FDM II showed that family functioning in families with infants under 18 months old had clear communication and a high level of role awareness, but lower levels of flexibility and individuation.

I believe the results on role awareness come from the mother's active attempts to enhance communication within the family as she fulfills her new role as a mother after her child is born and she begins to raise her child. The low results on flexibility seem to reflect not lack of flexibility, but low functioning in bringing about changes as a family.

My study suggested that further studies taking into account the changing cultural environment in Japan should involve careful selection of the items used in questionnaire on the Japanese version of FDM II.
